
笑う状況じゃ無いけどな

春後秋前

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笑う状況じゃ無いけどな

【Nコード】

N45230

【作者名】

春後秋前

【あらすじ】

彼らは死刑囚。

死刑囚用四人部屋で出会った、何の罪も無い人たち。

全員は個人で抜け出そうと考えるはずのそこで、彼等は手を組んだ。

さまざまな困難を抜けくぐり、彼等は笑う。

いつか、あの場所でまた笑えるまで。

オープニング（前書き）

オープニング

ある四人組の小会議〓〓牢獄〓〓

「さて、俺達は運命という三途の川から飛び出す予定だけれど……
覚悟はまだあるんだろうね」

「あるやろ。俺はまだあんで」

「まだ、どころか死ぬほどあるだろ。私も、タンクいっぱいにある
ぜ」

「すみま……せん、わた……し、こわ……いです」

三人の視線が一人へ向く。そしてばらばらに視線が浮いた。不思議そうに一人は首をかしげる。

「どうか……なさいました？」

「お前が一番おっそろしーわぁ」

青年がぼつりと呟く。

「そう……ですか？ 何故、です？」

少女が不安そうに尋ねる。

「それは、あれだよな」

娘が苦笑いしつつ言う。

「そだな、あれだな」

男が笑った。

独特な話し方の青年が唇を尖らせ、黒髪をぐしゃぐしゃにした。

「あれやな」

「あれって何ですか!？」

不安そうだった少女が赤い瞳を全員に向ける。

真っ先に向けられた緑目の娘はにこにここと笑う。

「それは、あれだよ」

「あれやなぁ」

訛りの青年がはははは、と笑う。

「お前は怪力娘なんだよ、だから大丈夫だよ。私が保証するぜ」
娘がケラケラと笑った。

少女は顔を真っ赤にする。

「な……わ、たしは怪力じゃないです……っ」

「ある意味怪力だよ？ いや、十分怪力さ。自信を持ちな」

「俺も、持つべきやと思うわ。かわええし、強いし、大人しいし」

「こいつとは、比べ物にもならないなあ」

「煩い。私とこの子は天と地の差がある事くらい知ってるし」

「あつれー。天と地獄の差やろ？」

緑目の娘に思い切り顎を蹴られ、独特な話し方の青年はゲフツと叫んだ。赤目の少女が、一層オドオドし始める。すると、スツと黒髪の男が間に入った。

「痴話喧嘩は後にしようぜ。まずは脱獄だよ」

「そうやね。っていうか、俺等だけちゃう？ 仲間作って脱獄計画
企てるなんてなあ」

「この世は上手く生きてこそ、だぜ。ってか、分かってんだろ？」
男勝りの、緑目の娘は笑う。

「そう……ですね。私は……皆さんと一緒に……うれしい……っで
す」

「やる？ この、イケメンなダンディと一緒にやったら、女の子は誰
でも嬉しいわ。でも気を付けやー、こいつ夜中に襲ってくるでー口
リコンやでー」

青年は、黒髪の男を指差した。

「え……っ？」

「からかうな。それに、俺はこんな年下に興味は無いよ」

「じゃ、私なら良いってわけか？」

「そついうわけでもないなあ」

「俺はどうやろ？」

「それは……同性愛になっちゃいます……似合いません」

「うつひゃ、ひどいやん」

けらけら、と彼は笑った。

そう、これは牢獄の中での会話である。

でも彼等は笑顔だ。

脱獄をする気満々である。——元々仲がいいのではなく、ただ単純にルームメイトだったただだ。そう、死刑囚の部屋は四人部屋だ。

「……このまま、死んではならないだろ？」

「ええ、もちろんだ。私は新鮮な空気を吸う。絶対吸う！ 何で私が捕まるのさ、有り得ないぜ」

「……この力、処刑などでは……壊させません……血族の思いを……繋がなければ……」

「そうやそうや。さっさと実家戻って、寝たいわあ」

「オッケーオッケー」

「ん、あんたはどうなんや？」

青年に尋ねられ、男は軽く引いた。

しかし、すぐさま答えを返す。

「愚問だよ。……生きて生きて生きてそいつやこいつみたいに、血族の思いを汚さずに新鮮な空気を吸う為、頑張るのさ」

「ああ、良かった。あんたが直前で迷ったら、俺等は処刑台確定やったわ。天才君やもんね？」

「いや、そんなわけじゃ」

「カッコいい。惚れるぜ」

「……」

その後、牢獄なのに爆笑。

笑っている事態ではないが、四人は心の底から笑った。いつか、腹の底から笑えると信じて。

オープニング 終

オープニング（後書き）

一言でもいいので、コメントお願いします。
では。

マゲロとハマチ（前書き）

新年明けましておめでとうございます。
では、どうぞ。

マグロとハマチ

「脱出を目論む奴等が現われた？ ああ、506室か？ あいつら、全員まさかの死刑申告だろ」

「そうなんですよね……ハマチさん、どう思います？」

「俺？ 何で俺なんだよ。うーんな、俺は全員まさかの死刑にびつくり」

「やっぱりそうですよね。何をしたのはかは教えてくれないし。上の方々」

「やっぱ……あれだろ、マグロよ」

「何です？」

「あれだよ。一名は遠国の訛り野郎。一名は怪力血族の子孫。一名はどこにでもいそうな娘。一名は天才野郎。全員、名を馳せていない上に、経歴が不明ときた」

「？？ 経歴は上の方々が全部知ってるそうですが」

「……これはあれだろ」

「いや、あの、さっぱりわかりません」

「俺の予想上、上の方々の罪を着せられた奴等。だろうな。例えば、狩猟禁止地区で狩猟しちゃったのがばれそうだぜーじゃあこいつに罪かぶしとけーみたいな」

「な、なるほど」

「でもよ、流石じゃね？」

「何がです？ ハマチさん」

「冤罪の奴だろうが真正正銘の犯罪者だろうが、こんなにルームメイト同士盛り上がるか？ 普通、もっと絶望するだろ」

「……そうですね」

「マグロ、お前はと思う？」

「さあ、どうとも思えませんね。でもまあこの部屋だけ食事持つて行くのは楽しい」

「あーそれ思っわ。昨日俺当番だったんだけどよ、あの訛りの兄ちゃんがまた面白くて……………」

「ハマチさん？」

「……………マグロ、もう一回俺にどう思っか聞いてくれ」

「何ですか急に小さな声で…………えっと、ハマチさん、貴方はどう思っます？」

「俺はな、もつと美味しい料理が食べたい！　ここの料理は質素だ！　くそくらえだ！」

「わあ失礼。…………ってあれ」

「魚の煮付けばかりの日もある！」「あの話題が」「肉ばつかの日もある！」「話が」「ビールも出ない！」「あの」「酒が欲しい！」

「何を叫んで——」

「つと、もう行っただな。ふう」

「え？」

「管理人だよ。こんな話聞かれたら一たまりもねえぜ。囚人に情は入れるな、だからなあ」

「……………ハマチさん」

「何だよ、急にしおらしくなっちゃって」

「僕も、囚人に情は入れないよう、昔は気をつけていました」

「うん俺もー」

「ですよー。でも、やっぱ入れちゃいますよね。だって、彼等も人間なんですし…………」

「そうだな。お前は若いのによくやるわ」

「え？」

「一つ忠告しとくけどな」

「はい」

「俺以外に仲間はいねえと思っつけ。俺だけに、そういうグチ言え。どこからどう流れるか溜まったもんじゃねえぜ」

「は、はあ」

「じゃねえと、その細首がぶっ飛びます！　今のみ出血代サービース」

「はあ……」

「俺、お前を気に入ってますんで。なかなか死ぬなよ！」

「了解です。貴方も、ですよ」

「はいよはいよ。可愛い配下の頼みです。聞いてご覧にあげましよう」

「配下って。後輩でしょう。もう、先輩なんて——あー良い例えが無い」

「そこは、海の藻屑に消えちまえとでも言っとけ若造が」

「じゃあ海の藻屑に消えちまえ」

「誰に向かってその口きいてんだ？　ああ？」

「いやそのあの、いやその」

「なっはっは」

「……心臓止まるかと思いました。悪徳詐欺」

「悪徳詐欺って。良い詐欺もくそもねえだろに」

「それもそうですね」

「……」

「……」

「……」

「……」

「ぐー……」

「すー……」

「いや待て突っ込めよ。つか何ガチ寝してんだよ！」

続

マゲロとハマチ（後書き）

一言でもいいので、コメント待ってます。
では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4523o/>

笑う状況じゃ無いけどな

2011年5月17日04時16分発行